

人名と漢字について

日中の比較を通じて

修 徳 健

0. はじめに

漢字は人名用文字として、中国を始めとして、日本、朝鮮半島、ベトナムなどの国や地域で、広く使われている。中国では、漢民族の人名用文字としては、漢字しか使わないうが、(少数民族の場合は一部例外がある)日本でも、一部の仮名文字のものを除けば、人名用文字としては、基本的には漢字を使う。

本稿は、日中両国に範囲を絞って、両国における現代の人名用漢字の使用状況に焦点を合わせ、名付けの意図や、用字の特徴などの考察を通じて、その異同を明らかにしていきたいと考えている。

資料は、中国語のものとしては、『^① 氏人名用字分析統計』(以下、『統計』と略す)を、日本語のものとしては、吉田澄夫「^② 名まえとその文字」、松本明「^③ できたぞ氏名番付」をそれぞれ主資料として使用することにした。この内、『統計』は、中国における人名用字に関する初めての調査であるため、注目される。調査は、全国を北京、福建、広東、遼寧、四川、上海、陝西の七つの代表地域に分けて、合計174900人を調査対象に行われた。調査項目は、男女別、地域別、姓名別など多岐にわたる。データは、コンピューターによって機械処理され、信憑性があると考えられる。これは、上記の「できたぞ氏名番付」と対比して用いることにした。

なお、本稿では、日中比較という立場から、便宜上、日中両国を通じて、「人名」は姓氏を除いた名のみを考察の対象とした。

1. 人名用漢字数について

日本では、現在、人名用漢字の使用に法律による制限を設けている。使用漢字は当用漢字表の1850字と、人名用漢字別表の92字、合計1942字あるという(ただし、読み方と字体は自由である^④)。字数の制限の外、片仮名や平仮名は使っていないが、変体仮名は使えない、ローマ字や符号字や算用数字は使えない)のように、漢字以外の文字の使用

にも規則を制定して、制限しようとする。また、妨名まえには用いない、妹子（イモコ）などは今はあまり用いない、年ミノルの訓は避けたい）のように、音訓に関する注意や、忌避字の提示など、漢字の使用にきめ細かな配慮をしている。これは、何種類もの文字を表記手段として使い、また、複雑な音体系を持つ日本語ならではの悩みと見えよう。

一方、漢字の国、中国では、現在、人名用漢字の使用に対して、日本のように特に制限を設けていないが、整理は行っている。その主な目的は、漢字の音や字体などの規範化や標準化の実現にあると言われている。上記の『統計』では、漢字使用の規範化、標準化のほか、定量化の実現をも調査目的の一つとして掲げているが、国土が広く、各地の習慣の違いや、方言差が激しく、それに基づく方言字の使用など、漢字使用をめぐる状況が極めて複雑であるため、中国における漢字制限は、そう簡単に実現できるものとは考えられない。このため、人名用漢字の使用の可否は、事実上、使用者が自主規制によって判断するものと言ってよいのである。

2. 人名と漢字

2.1. 人名の型

吉田澄夫「名まえとその文字」によると、日本では、人名には、昔、男女ともに「幼な名」「呼び名」「名乗り」(実名)があり、ほかに男子に「あざな」、女子に「源氏名・雅名」があって、現代人の名は右の命名法のどれかの系統を引いているという。

『日本語百科大辞典』^⑤によると、人名は古くから、中国の影響を受けてきたが、それには、幼名・名・通称・字・号・雅号(一種のペンネーム)・筆名などがあるという。このうち、通称・字・号・雅号などは、伝統的なものとして、現在、特殊な世界や一部の人々の間でしか、使われず、現代日本人の名は、通常、上記の「名」のことを指すと考えられる。一方、中国では、古くから「多名」の風習があって、その影響が日本など周辺諸国にも及んでいる。『礼記・檀弓上』によると、「…幼名、冠字(成人式の時に付ける名)、五十以伯仲(敬称)、死諡、周道也(周の国の礼)」「カッコ内は筆者の注)。人名には「名」「字」「敬称」があり、これに死んだ人に送る「諡」を含むと、基本的に四種類あるというのである。後に漢の時代から「号」が生まれ、人名の基本型は「名」「字」「敬称」「諡」「号」の五種類となり、現在に至っている。このうち、「名」には「幼名」(小名・乳名ともいう)と「正名」(大名・学名・書名・官名・族名ともいう)があるが、「正名」は日本の「名」、つまり「実名」に当たるものとして考えられる。「号」は「別号」ともいうが、号には、自分で付けた「自号」をはじめ、人から付けら

れた「人号」など、いろいろな種類があるが、ここでは、詳細な紹介を省くことにする。現在では、「名」「字」「敬称」「諡」「号」の内、「名」だけが一般的なものとして残り、ほかの四種類の名は、日本の状況と同様、かなり珍しいものとなっている。

上記からも分かるように、人名の型においては、昔も現在も、日中間にそう大きな違いはないと言ってよからう。

2 2 . 人名の名付けの原則（以下、名付けは人名の名付けのことを指す）

吉田澄夫は、「名まえとその文字」の中で、名付けにおいて、漢字使用の三原則を記した。それは、①よい意味をもっていること、②やさしい文字を選ぶこと、③やさしい読み方をもっていることの三つである。つまり、名付けの漢字選びは、字義・字形・字音の三つを総合してすべきだというのであるが、数限りのある人名用漢字の中から、上記の三つの原則に従って文字を選ぶということは、決して簡単にできることではないと思うのである。例えば、②のやさしい文字を選ぶこと（字形）を中心に据えて考える場合に、他の①と③に対する選択の余地が、ある程度、制限されてくるのではないかと予想される。名付けにおける漢字使用の簡易化原則の強調は、場合によって、名付けに新たな難問を突き付ける可能性もあるため、注意を要する。

一方、中国では、「命名之道」^⑥（名付けの原則ともいうべきもの）と呼ばれるものが古くからあって、古いものに、『左氏伝・桓公六年』がある。それによると、「名有五：有信，有義，有象，有假，有類。以名生為信（出生時の嬰兒の特徴。例 周の桓公は、肩に黒い痣があるため、「黒肩」と名付けられた。また、晋の成公は、尻に黒い痣があるため、「黒臀」と名付けられたという）、以徳命為義（美徳吉祥の字義。例 仁，義，徳，信，福，禄，寿など）、以類命為象（嬰兒の人相や性情。例 孔子は生まれたとき、頭が丘のように尖った形をするから、「孔丘」と名付けられたという）、取於物為假（動植物，自然現象，その他万事万物。例 孔子は、子供が生まれたときに、鯉の魚を見たため、「孔鯉」と名付けたという）、取於父為類（祖父や父親の名に基づく…。例 魯の桓公は、子供の生まれた日は自分と同じ日であるため、その名に「同」という字を用いたという）というのである（カッコ内は筆者の注）。

また、同書に上記の「五有」原則の外、「六不」という命名の忌避の原則をも示した。それによると、「六不」とは、「不以国（国名を忌避する。例 魯国の人には、名前に魯の字を用いない）、不以官，不以山川，不以隱疾，不以畜，不以器幣」というものである。これらの原則ともいうべきものは、中国における命名方法の基礎となり、後の時代に大きな影響を与えたものと言われ、現在でも、もっとも基本的なものとして、自覚され、守られているようである。

2 3 . 名付けの方式

名付けの方式は、その動機と意図とを結び付けて考えるべきであろう。この面においては、日中間に交流の歴史を踏まえて、何らかの異同があると予想される。次は、関係資料を使って、その様子や特徴などを簡単に見てみよう。

森岡健二は、永野賢の「子供の名付けの心理」ならびに「名付けのために知っておきたいこと」の調査によって、親が子に名を付ける場合の動機や意図およびそれによる漢字使用の様子を紹介したものをまとめ、「人名の型と由来」と題して、『岩波講座・日本語 2・言語生活』（岩波書店、1977年）に論文を掲載した。その一部をここに引用しておこう（挙例は漢字名2例のみに止めたい）。

①誕生を記念して

生まれた月日・季節にちなむ名 「正一」（正月一日）「葉子」（葉月生まれ）
土地にちなむ名 「富士男」（富士吉田生まれ）「利佳子」（アメリカ生まれ）
社会的事件にちなむ名 「範子」（海苔の豊年）「憲文」（憲法発布）

②音声・文字の条件から

ひびきのいい名 「行雄」「香代子」は呼びやすく、「美紀」「三重」は女らしく可愛い。

読み書きしやすい名 「八千代」は読み違いがおこらない。

字形・字づらのいい名 「宣雄」「英雄」は左右対称で落ち着きよく、「清香」は字づらがきれい。

ローマ字で書いてもいい名 Tunenori より Tuyoshi のほうが形に変化がある。「丞二」George、「富」Tom はローマ字で書くと外国名になる。

画数・字数を考えた名 姓名判断で画数を合わせたり、三字姓なので「五十嵐純」「佐々木淳」のように一字名にしたりする。

③意味から

親の願いをこめた名 「健」（丈夫に）「聡」（賢く）

故事成句からの名 「厚江」（下忠厚ノ俗ヲ以テ上ニ奉ジ…詔書）

親の仕事にちなむ名 「英」（英語教師）「彩」（画家）

姓との調和を考えた名 石井姓なので水に関係のある「浩，淳，潤，治，洋子」から選ぶ。また「高野耕」も姓と名のつながりをつけてある。

④人にあやかるため

尊敬する人にあやかる名 「靖」（井上靖）「春樹」（島崎藤村の本名）

親族名から字をとった名 「宗賢」（先祖の賢丸から）

⑤兄弟の順序から

呼び名系統の名「剛一」「泰二」「元三」など

他の方法で順序示した名「信夫」「望」「愛治」(聖書の信仰・希望・愛の順)

また、最近の傾向として、漢字一字の名、万葉仮名、「子」のつかない名、仮名書き、特別の意味をもたない漢字が好まれるということを挙げている。

以上を見ると、名付けの方式十六項目の内、②の音声・文字の条件の五項目と③の意味の四項目によって考えたものは、合わせて九項目にものぼり、全体の半数以上を占め、多用されると考えられる。また、音・義・形の三つの要素を合わせ持つ漢字の特性を生かしていることが分かるのである。更に、上記の調査を見る限りでも、昔、多用と考えられていた干支や陰陽道のような伝統的なものは、繁雑なためか、頻用の十六項目の中に含まれていなかった。その代わりに、ローマ字で書いてもいい名や聖書の信仰・希望・愛の順によって名を考えるようなものは、頻用項目となって挙げられるようになっているのは注目される。これは、名付けの分野にも、形式と内容の両面において、積極的に外来要素を取り入れようとする傾向として見てよからう。

次に、中国における名付けの方式の様子を見てみよう。資料としては、『中国文化知識^⑨』を用いることにした。次のようにまとめられる。

①漢字の音を考えた名

同一子音をそろえた名(中国語で「双声」という)

「袁涛塗」「倪黎来」のようなものは、呼びやすい。

同一母音をそろえた名(中国語で「疊韻」という)

「扶蘇」(始皇帝の長男の名)「叔孫州仇」

②字形を考えた名

漢字は、構造的に見て、その九割ぐらいは、「江」「河」「松」のような、合体の表形表音の形声字で、「人」と「言」と合体した「信」や、「女」と「卑」と合体した「婢」のような会意文字は、数が少ないと言われている。これら漢字の構造上の特性を生かして考えた名は数が多い。次に挙げてみよう。

姓の漢字に偏や旁など部首を加える

「王匡」「呂品」「石磊」「林森」

姓の漢字の偏や旁など部首を取る

「陳東」「阮元」「盛成」「翁羽」

姓の漢字を分解する

「許言午」「董千里」「雷雨田」「張長弓」「楊木易」「胡古月」

姓の漢字に似た字形をもつもの

「王主」「王玉」「王壬」

③順序を示した名

二字名の内、一字が同じもの

「僑如」と「榮如」と「簡如」

一字名で、漢字の偏や旁などによって順序を示した名

「劉琳」「劉玲」

同じ漢字を二つ、または三つ重ねてできた一字名

「朋」「炎」「羽」「晶」

④意味から

姓とのつながりで考えたもの

「江万里」「安如山」

回文を考えた名

「王人美」(美人王)「聞多」(文学者「聞一多」の名、多聞)

その他、親などの願いを込めた名、男女の性差を考えたもの、情操や美徳を考えたものなどもある。この種のもは、長い間、極一般的に行われてきたものであるため、その数も多いので、挙例を省くことにする。

⑤人にあやかるもの

尊敬する人にあやかっただけの名

唐の詩人李白のことを慕って「李慕白」、三国志の英雄「蕭何」にあやかって「蕭仰何」とするような、名付けがそれである。このほか、数字によるもの、干支を考えたものなど、いろいろあるが、ここに、主なものを挙げただけに止めたい。

以上を見ると、中国では、名付けにおいては、漢字の構造的な特徴を生かす方式が多用されると考えられよう。名の意味は、無論重要であるが、それより、多くの場合、漢字の字形に注目し、字の分解や合体などによって名を考える傾向のほうがもっと強いように見られるのである。そして、時には、文字遊びの様相も伺えるのである。これは、漢字の国、中国においては、当然のことであるかもしれないが、これほど苦心して名付けをすることは、やはり驚くべきことであろう。

2 4 . 名付けと漢字の使用

松本明「できたぞ氏名番付」によると、名前に多い字は、男性では、

一、雄、郎、夫、男、正、治、三、義、二、次、幸、吉、勝、清、和、明、昭、弘、

彦

女性では、

子, 美, 代, 恵, み, 江, 枝, ミ, 千, 和, キ, ヨ, ツ, き, 久, 由, サ, よ, 智,
幸

の順であるという。男女共通して、高い使用頻度で用いられるのは、「和」と「幸」の二字であって、協調性を重視する「和」の精神への志向と子の幸せを願う親の心が伺え、それが特徴となっている。また、男性では、雄, 郎, 夫, 男の四文字がベスト二十の上位四位を占めるのは、性別の差は、はっきりと表すべきだという意識によるもので、「男は男らしく」という強い期待が込められていると感じられる。

次に中国の状況について見てみよう。『統計』によると、調査で得られた漢字数は、合計3345もある。ここに名に多い字上位二十位を示すと、

男性では、

明, 国, 文, 華, 徳, 建, 志, 永, 林, 成, 軍, 平, 福, 榮, 生, 海, 金, 忠, 偉,
玉

女性では、

英, 秀, 玉, 華, 珍, 蘭, 芳, 麗, 淑, 桂, 鳳, 素, 梅, 美, 玲, 紅, 春, 雲, 琴,
恵

の順となる。

『統計』では、1982年の国勢調査のデータを四つの時期に分けてコンピューターによって、処理を行ったという。第一期は1949年以前とし、第二期は、1949年～1966年とし、第三期は1966年～1976年とし、第四期は、1976年～1982年とした。それによると、使用頻度の順は地域によって、多少の違いがあるものの、全体としてみて、四つの時期を通じて比較的に安定して使われた字は、上位二十字の内、男性用では、華, 明, 志, 永, 平の五字で、女性用では、英, 秀, 玉, 華, 珍, 蘭, 芳, 麗, 淑, 桂, 鳳, 素, 梅, 美, 玲は、伝統的な用字として、安定して推移しているという。また、第二期では、建国直後の影響もあって、国, 華, 建, 民の使用率が他のものより遥かに高いという。更に、第三期では、文化大革命の影響で、文, 紅, 梅, 軍, 衛, 兵などの字の使用頻度が、他の三つの時期より、高い率を示している。これは、現代中国人の名は、時代の変遷と社会の変化、また、政治によって、大きく変わることをよく物語っているものである。この点は、特に男性の名に強く反映されている。統計では、日本人男性の名に高い出現率の見られる漢字「清」は22位(2619)、「治」は73位(1159)、「和」は128位(631)、「雄」は151位(530)、「男」は636位(47)となる。郎, 夫などのような人名常用字は、見当たらないのである(カッコ内は使用回数を示す)。また、第四期では、

いわゆる外国人名の宛字の多用が目立つという。例えば、「娜」「妮」などの人名用字の中の希少字は、女性名に多く使われている。これは、名付けに外来要素を積極的に取り入れようとする姿勢を示すものとして注目される。

3. 終わりに

以上は、日中の比較を通じて人名用漢字を見てきたが、総じて、次の二点が指摘できよう。

一、名付け方式の面においては、双方とも、繁雑で伝統的なものの使用が減少している。この点は、中国のほうが、特に目立つ。一方、新しい要素、特に外来要素を積極的に取り入れようとする傾向が強いと見られる。

二、現代中国では、人名用漢字の使用において、意図的に見て、政治や社会的な事件などの不安定要因の影響を受けやすく、変化が激しいと言える。それによって、伝統的な由緒のある名付け方式が無視され、名付け方式の単純化傾向が強く現れている。また、それによって漢字使用の平俗化、男女の性差による漢字使用の分別解消などの現象も生じている。このことは、日本のような漢字制限による名付けの簡易化とは性質が異なっていて、注目される。

本考察では、紙幅の関係のため、姓と人名用漢字の関わりについて、触れなかったが、実際には、両者の間には密接な関係がある。今後の課題として、その詳細について考察を続けたいと考えている。

注

- ① 中国社会科学院語言文字応用研究所漢字整理研究室編，1991，10 語文出版社
- ② 『文化庁国語シリーズ 漢字』1951年
- ③ 「日本経済新聞」1976年4月5日
- ④ 「名付けのために知っておきたいこと」『言語生活』一三八号，1963年
- ⑤ 金田一春彦等，縮刷版，大修館書店，1995年
- ⑥ 『中国生育文化大観』鄭曉江等，百花洲文芸出版社，1999年
- ⑦ 中国古典名著訳注叢書『春秋左傳注』（修訂本）楊伯峻，中華書局，1990年
- ⑧ 『言語生活』九二号，1959年
- ⑨ 『中国文化知識』許樹安等，北京語言文化大学出版社，1987年

（付記）

長年にわたってご指導を賜り、激励を受けつけてきた恩師玉村文郎先生に深甚なる敬意を表します。また、原稿に目を通して、細かい点をチェックして下さった編集委員の藤井俊博先生にもお礼申し上げます。